

「じじろ」11 Kの真実 その九

Kは自殺するとき「平生のK」になったか、「違ったK」か？

Kの「平生」はどうだったのか？

(1) 126下10「道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのですから、撰欲や禁欲は無論、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨げになるのです。」

(2) 120上16「Kの肉が震えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生から何か言おうとすると、言う前によく口の辺りをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するようにたやすく開かないところに、彼の言葉の重みもこもっていたのでしよう。いったん声が口を破って出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。」

(3) 125上6「度々繰り返すようですが、彼の天性は他の思わくをはばかるほど弱くできあがってはいなかったのです。」

(4) 128下6「彼はいつも話すとおりますこぶる強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられない質だったのです。」

(5) 131下13「Kの果断に富んだ性格は私によく知れていました。」

・「道」を突き進んでいる。
・恋愛はもつてのほか。
・他人のことは気にしない。
・自分で考え、自分で決断し、自分で行動する。

「平生」のKはいつからどう変化したのか？

(6) 115上9「彼の答えはいつものとおりふんという調子でした。」

(7) 119上3「幸いにKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかった私は、無事にその場を切り上げることができました。」

(8) 119下15「Kはいつもに似合わない話を始めました」

(9) 120上10「以前私のほうから二人を問題にして話し掛けたときの彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変わつていくところに気が付かずにはいられないのです。」

(10) 121上8「Kはその間いつものとおり重い口を切っては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けてゆきます。」

(11) 124上11「Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近づけました。御承知のとおり図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をするわけにいかないのですから、Kのこの所作はだれでもやる普通のことなですが、私はそのときに限つて、一種変な心持ちがしました。」

(12) 125上3「一言で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認めることができたと思いましたが。」

(13) 125上13「彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが實際恥ずかしいと言いました。」

(14) 125上15「迷っているから自分で自分が公平な批評を求めるよりほかにしかたがないと言いました。」

(15) 136上13「しかし彼はいつものとおり今帰ったのかとは言いませんでした。彼は『病気はもういいのか、医者へでも行ったのか。』と聞きました。」

(16) 139下6「そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返つて、『結婚はいつですか。』と聞いたそうです。それから『何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げることができません。』と言ったそうです。」

(17) 140上14「いつも立て切つてあるKと私の室との仕切りの襖が、この間の晩と同じくらい開いています。」

(18) 141上17「今まで私に世話になった礼が、ごくあつさりした文句でその後に付け加えてありました。」

(19) 141下3「奥さんに迷惑を掛けて済まんからよろしくわびをしてくれという句もありました。」

・平生のKは他人のことは気にせず、自分の道のみを考えている人間だったが、自殺の時点では他者への思い遣りができる人間になっている。

Kが自殺した時点

平生のKに戻っていたら……

「道」を突き進むために自殺した

平生のKに戻っていなかったら……

a 恋愛のために自殺した

b 自分の人生を否定したために自殺した

「覚悟ならぬこともない」

「覚悟」「自殺」であるので、Kの恋が叶わないと知る前に自殺するつもりだった。

aではない

私は奥さんやお嬢さんにKを近づけることによって、Kを「人間らしく」しようとしていた。そしてKはお嬢さんに恋愛感情を抱くことにより、「人間らしさ」が芽生えてきたのである。

一方、Kが今まで全身全霊をかけて突き進んでいた「道」というのは、Kに芽生えた「人間らしさ」とは全く別方向のものであった。「人間らしさ」を身につけることによってKは今まで自分の人生をふりかえることができ、今までの自分の「他人を無視した生き方」に絶望した。

「もっと早く」とは？

「覚悟ならぬこともない」と言ったあと、自殺するまで二週間以上の時間が経っている。この時間Kは何をしていたのか？土曜の晩（日曜日早朝）自殺すると決めていたとしたら、二回ほど土曜の晩をやり過ごしていることになる。どうしてやり過ごしていたのか？

一回目の土曜の晩では、つい数日前まで熟睡できていた私の精神状態はKの発した「覚悟」の捉え方に思いをめぐらせることにより、不安定となり、熟睡できていなかった。二回目の土曜の晩も、私の「Kに対する絶えざる不安」のため、熟睡できていないのだ。三回目の自殺の決行日では、私は「ともかくも明るく日まで待とうと決心した」のであり、前の二回の土曜の晩よりは熟睡できていたのである。つまり、Kの自殺は「私の熟睡待ち」であった。

その間に私はお嬢さんと婚約し、奥さんからそのことを知られるというイベントが発生した。Kはそんなことがあるうがなかるうが自殺するつもりだったのだが、それらを知らないこ

とに越したことはない。人への思い遣りが芽生えたKにとつて、自殺による私の動揺も考えたし、結婚への影響も考えた。それらに影響する前に自殺した方がよかったという意味がある。しかしもっと強いのは、自分が全身全霊をかけて信じていた第一信条は無意味であるということが自殺の原因であるので、それを歩んでいる時点で死ぬべきだったと考えたのだ。

「私」を恨んでいたか？

Kに私は何も救いの手をのばしてやらなかった。Kは自分の第一信条を疑問に思いだったが、「策略」によって第一信条の方向へ進ませようとした。しかしKは第一信条は意味がないと気づいているので、そちらに進むことはできない。恋愛の方面に進むことも、今までの自分の生き方や主張から、私の手前できない。自分の今の生き方と、これから新たに覚えてきた生き方の間に挟まって苦しんでいた。決して「理想と現実の間」に挟まっていたのではない。なぜなら、私の策略によって簡単に第一信条に戻れるなら、Kは初めから苦しんだりもしない。さつさと第一信条に戻ったはずだ。また、策略によって簡単に消えてしまう恋でも苦しむはずはない。つまり、自分の人生を否定して、これから新たな人生を歩めるかどうか悩んでいたのだ。しかしそのときに、私はKに新たな生き方（他人と関わって生きていってもいいこと）を指し示さなかったのだ。

「それをやめるだけの覚悟」の「それ」は、「お嬢さんへの恋」でもなく、「第一信条」でもなく、Kにとつては「生きること」であった。つまり、ナルシズムにより、己の信ずる道のためだけに生きていたが、それに疑問を持ち、周りの人と関わることに気づいたとき、周りの人と関わってはいけなさと私に言われたのだ。そこで私は「たった一人で寂しくってしかたがなくなつた結果、急に所決した」と述懐している。つまり、私によって「周りに人がいるよ」と教えられ、私によって「周りの人へつまり、「私」はおまえに関わらないよ。」と教えられたのだ。これで恨まないはずはない。

恨んでいた証拠にKは私の隣の部屋で自殺している。「一人だ」と気づいたのであれば、外で一人で死ぬことも選択肢にはあるが、そうはしていない。襖を開け、私に自殺の姿をわざわざ見せている。私に対する腹いせがあるし、Kの決断を見せつけているのだ。「覚悟」を私に見せたかったのだ。「見せる」というのは、「関わる」ということだ。関わりを拒まれたKは死ぬことで関わるしかなかった。

また、「恨み」は関わりであり、「平生のK」は「恨み」という感情自体も持つことはなかったはずだ。関わることで様々な感情を噴出させ、Kは死を選んだのである。